

供覽

36

海

下13	3	20	永	法務局
	公布迄	完結迄	永	

人事局

軍務局

八月九日經由

昭和十年八月四日

館山

第十驅逐隊司令

大臣殿

第二課 駆逐艦隊 駆逐艦隊 事件報告ノ件 進達

首領ノ件別紙 曉諭 艦長ノ報告ノ通

山田

廣田

大角

齋藤

高橋

土肥

磯谷

香月

坂井

神谷

坂井

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

海軍省

昭和八年七月 大倉

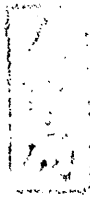
二三三

人事局 8.24

海軍省 8.8

0614

20



驅逐艦哨觸衝報告

海軍省

海

昭和八年七月 大倉納

昭和十年八月四日

曉驅逐艦長橋正雄

一、觸衝ノ日時刻並ニ場所

昭和十年八月一日第三水雷戰隊戰闘枚射運動中

一四二六神島燈台ノ九五度一七五理ニ於テ驅逐艦曉

ノ前部彈火藥庫下方舷艦底ヲ以テ伊號第六

潜水艦潛望鏡ニ觸衝セリ

二、六候視界並ニ海上ノ模様

晴視界良好ハ約三〇〇米（風向南西風力九米

海上ノ模様稍波浪アリ

三、觸衝ニ至ル迄ノ経過

昭和十年八月一日第三水雷戰隊戰闘枚射ニ參

加豫定ノ如ク神島燈台東方海面ノ潜水艦掃

海軍

昭和八年七月 大倉納

海軍

昭和八年七月 大倉納

蕩ヲ終リ一三四五神島燈台ノ一五度ノ渾附近ニ於
 テ第四戰隊直衛トナリ小官監督ノ下ニ航海長
 海軍大尉鈴木莊ヲシテ操艦セシメ基準針路
 一一〇度速力十六節ヲ以テ戰鬪部署ニ就キ對
 潛警戒航行中一四一二左二八度ハ真方位七七度
 約三五〇米ニ潛望鏡ヲ認メタルヲ以テ之ニ對シ爆雷
 攻撃ヲ決意シ七五度ニ變針スルト共ニ二十四節ニ増速
 一四一六枚射開始一四一七更ニ針路ヲ九〇度トナシ
 一四一八枚射ヲ終了強速十八節ニ減速ス次デ本
 艦艦位カ直衛ノ定位置ニ對シ著ク左前方
 ニ進出シタルヲ以テ取舵ニ反轉一四二一原速十五節
 針路二〇度トナシ第三枚射位置浮標ニ向首一
 四二三該浮標通過後直衛ニ復歸スバク西舵

海軍

昭和八年七月 六合納

ニテ及艀中一四三五右三〇度約七米ニ急ニ潛望鏡ノ水面上ニ現ル本艦ニ近接シ來ルヲ及發見シ危險ヲ感シテ
 ルヲ以テ直ニ取舵一杯後進一杯ヲ令スモ及バズ一四二六
 艦首方向三三〇度交角約五〇度殘存速力約四節
 以テ前部彈藥庫下艦底 該潛望鏡ト能
 衝シタリ以テ直ニ總員ヲ防水部署ニ就カシム一四三七
 該潜水艦ノ浮上ニ依リ伊號第其潜水艦ト認識ナリ

四、觸衝後ノ屢置置善ニ損害ノ狀況

一、觸衝ト同時ニ總員ヲ防水部署ニ就カシメ損傷
 狀況ヲ調査セルニ右艦水線下ニ五米三三乃至三番
 コーハ間及三七乃至三八番コーハ間ニ箇所ニ於テ
 潛望鏡ト觸衝セルタメ鉄板最大約五程内方ニ
 壓入セラレ鉄板ノ接合部ニ弛ミヲ生ジ又同附近ニ

海軍

昭和八年七月 大倉納

於テ、兵ノ弛緩シテ、濺瀆セルモノ、教本アリ、一時間約々
乃至、玄噸ノ浸水量アルヲ發見ス(別回第一参照)

③應急處置

各漏洩部ニ、撫綿ヲ填充スルト共ニ、別回、如ク三七乃至

三八番目トシ、間ニ長サ五四。耗巾四二。耗深一五。耗ノ占

毛布衛帶ヲ附シタル防水篋ヲ内側ヲ當テ浸水量

ヲ約クニ噸毎程度ニテ得タリ(別回第二参照)

④一四五八航海ニ差支テ、ヲ認メ、前進半速力(九節)トシ

續テ、原速力十二節トス、モ異状ヲ認メ、一五五三原隊

ニ合同ス

一八七艦内、迄急修理完成セルヲ以テ、二十四節ニ増速状

况ヲ檢スルニ、異状ナリ、差當、戦闘航海ニ支障ナ

モノト認メタリ、一九〇五命ニ依リ、第三水雷戰隊ヲ

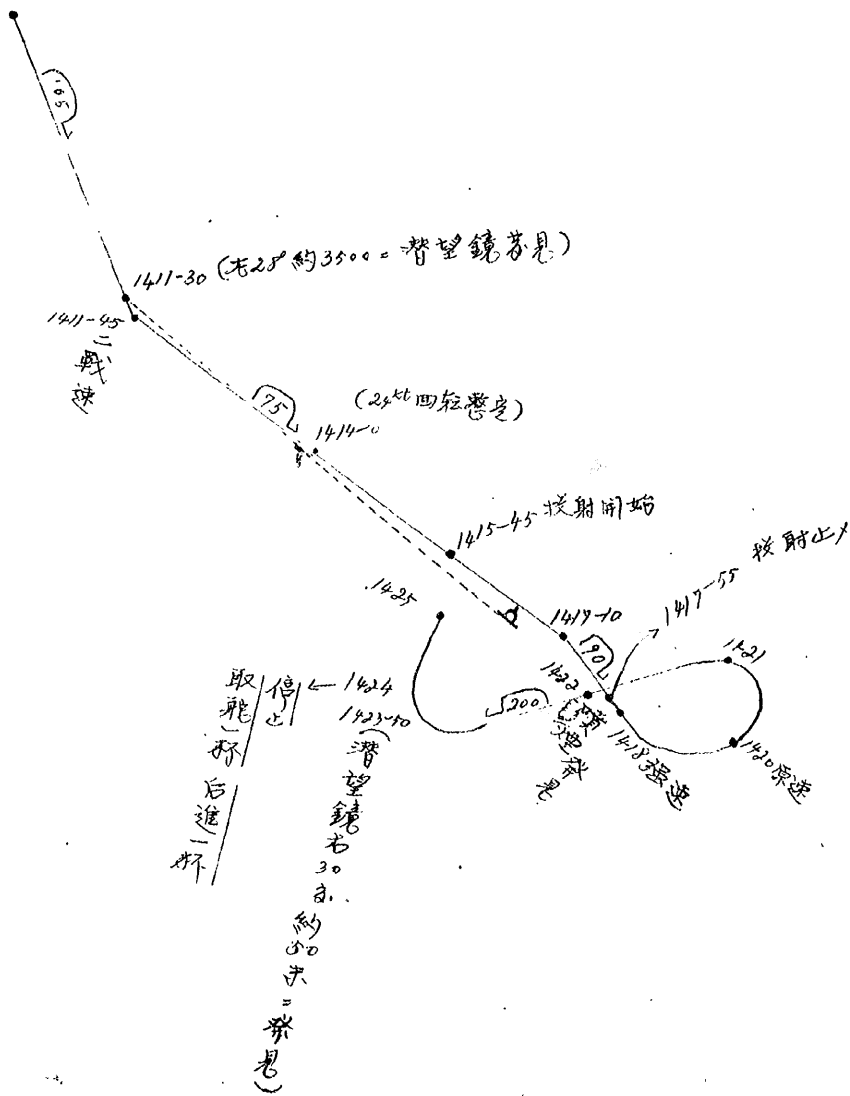
分離し横須賀二回航應急修理ヲ為ス

認

海軍

昭和八年七月 大倉納

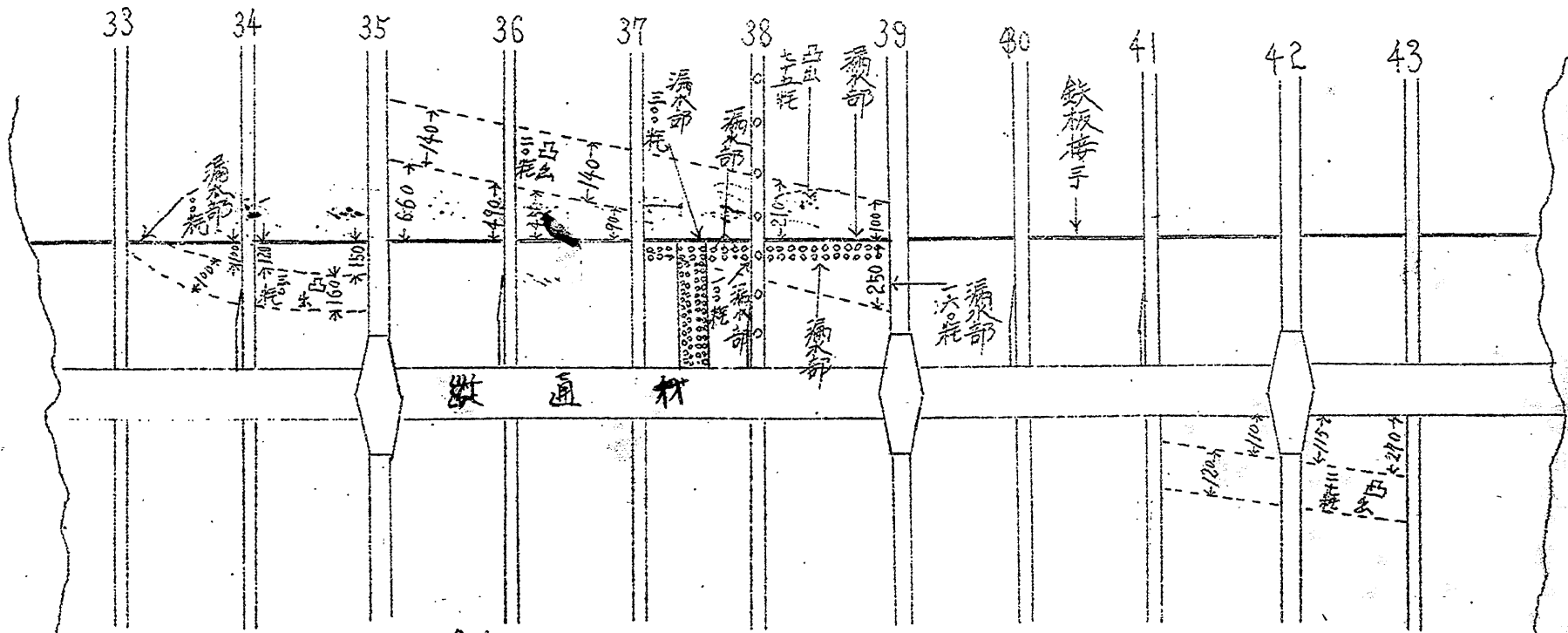
觸衝二重ル道ノ運動圖



0620

(別圖第一)

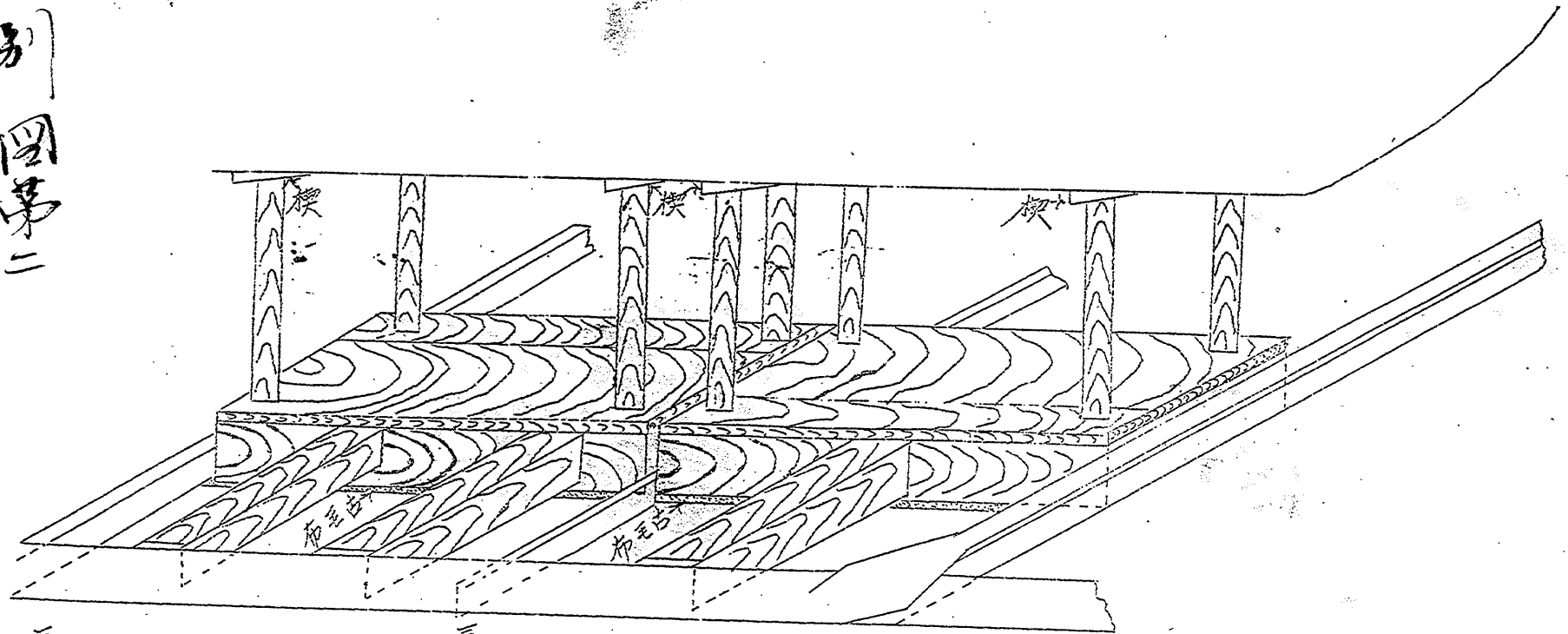
別圖第一



鉄 至 各 寸
間 席 尺 耗
線 内 凸 出 部
鉄 板 厚 寸 耗

0621

別圖第二



三十七番

0622

三十八番

三十九番